
幻想決闘伝 6 D's

ユンケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想決闘伝6D's

【Nコード】

N3884BA

【作者名】

ユンケル

【あらすじ】

幻想郷から一部の少女達が消えた……。彼女達は何と遊戯王5Dsの世界に飛ばされていた！？
新たな遊戯王が幕を開ける！

少女の夢（前書き）

はじめまして。処女作ですがよろしく願います。

少女の夢

ある少女が夢を見ていた。6体の龍が黒い『何か』達と戦っている様子を空中から見ている夢だ。

3つの瞳で辺りに潜む敵を探し出し、葬り去る魔眼の龍。

黒い羽を撒き散らし、高速で天を駆け抜ける黒羽の龍。

亡骸を喰らい、自らの力へと変換する屍の龍。

辺り一面を焼き払い、敵の攻撃を跳ね返す灼熱の龍。

不思議な光を放ち、敵を弱体化させる金属体の龍。

強力な激流で味方を守り、敵を消滅させる暗黒の龍。

そしてあの、あの黒い怪物は………るか！龍可！

「龍可！」

私を呼ぶ龍亞の声には目を覚ました。何だっただんたろうあの夢。たまに夢に出てくるあの龍達とは違ったような……

「大丈夫？ スッゴいうなされてたけど」

「うん、大丈夫……ちょっと悪い夢を見ていただけだから」

「そっか……体の調子が悪かったら言ってくれよ」

「うん」

もう一度眠ろう、まだ夜中だし。でもあの龍達は何なんだろう？
あの夢に出てくる龍と関係があるのかな……

少女の夢（後書き）

5体は東方キャラの龍、1体はオリキャラの龍です。多分解るはず。
正解した君にはオプーナを買う権利をやろう。

とある異世界の少女消失

「幽々子様ー？ どこにいらっしゃるのですかー？
……いないのかなあ？」

白玉楼のどこにもいない。やっぱり節約のための食事の切り詰めは耐え難かったかなあ……

「ちよつといいかしら？」

「あ、咲夜さん。こんにちは」

後ろを見てみれば紅魔館のメイド長である咲夜さんが立っていた。
何の用だろう？

「突然だけれど妹様を知らないかしら？」

「妹様…… フランドールさんですね。私は見ていないですよ」

「……そう、ありがとう。お邪魔したわね」

「あ、幽々様がどこにいるか知りませんか？」

「ごめんなさい、知らないわ。……… そうですね竹林の方で蓬莱人を見なくなったって話は聞いたわね」

「私も説教の最中に閻魔がいなくなったという話を死神から聞きました」

最近、突然人が消えるという話を聞くけど……… もしかしたら。咲夜さんも同じ答に辿り着いたらしく、お互い同時に口を開いた。

「紫様！」「隙間妖怪！」「だから私は何も知らないのよー！
無実よ無実！」

「あんたの仕業だつてのは解つてんのよ！　よく外から人を連れてくるし、今度は外の世界に放置してみようとか？」

「ちよつと今回は度が過ぎるっていうか……。あんまり間を開けると地獄も困るんだよね」

「総領娘様はどこに……」

「さとり様はどこよー！　あとお空も！」

「宝塔は……」

「ところでこの宝塔を見てくれ。コイツをどう思う？」

「すぐく輝いています……。じゃなくて！返してくれ頼む！」

「オーモイーガー」

「テレッテ」

「姫様がいなくなっちゃったんですよー！」

「だから知らないのよー！！」

「皆さん何をやっているんですか」「妖夢ー！　ヘルペスミー！」「ヘルプミーですよ……」

紫様が縄で縛られて糞虫みたいになっていました……

「で？　どこに隙間送りしたの？」

「だから知らないって……。とりあえず降ろしてくれない？　このままだと頭がパーンよ私……」

「口を割ればね」

「誰か助けてえ……」

皆さん怒っていますね。私も少しは怒っていますよ、小町さんの言う通り今回の規模はおふざけがすぎる。でも本人は知らないと言つて「霊夢さーんー！！」

「あら何？　　椛じゃない。人捜しなら紫に「違っんです！」

皆、え？　　という顔になる。勿論私も。

「文様が……文様がぁ……」

「……とりあえず落ち着きなさい。何があつたの？」

椛さんの話を纏めるところだ。

椛、文の2人で昼食をとっていた。すると、ひび割れた音を発しながら目の前の空間が割れ2人を吸い込み始めた。文は自分を突き飛ばして自分を逃がしたが、文は吸い込まれて消えてしまった。

そしてすぐに空間のひび割れも消えてしまったという話だ。

「空間にひび……紫の能力じゃないわね。でもおかしいわね、結界に異常は見られないわ」

「ほらね！　　ほらね！」

「じゃあ誰かがおかしいな能力を使ってるってことか？」

「あのー、みなさん？」

「有り得ないことじゃないわね」

「対策方法は？」

「椛、ひび割れる音がするのよね？」

「はい、確かにひび割れる音がしました」

「もしもーし？」

「音がしたらすぐに逃げるようにすればいいと思う。証拠に椛は無事でしょ？」

「確かに、ひび割れの場所に注意すればいいな」

「……あのー！　　聞いてるー！？」

「霊夢、これは久々の」
「ええ」

異変よ

「私を無視しないでよー！

頭がパーンよー！！」

とある異世界の少女消失（後書き）

次から5D・sです。

サテライトの黒鯨（前書き）

文章力が足りない！ 一応オリカが登場します。 すごく特殊召喚
条件が緩いです。

サテライトの黒鯨

ーサテライトー

主にマーカー着きの者達が住んでいる場所。裕福で安全なシティとは違い治安が悪く、スラム街を思わせる街並みである……

――――

「う……」

眩しい……。太陽！？ どこかに隠れないと！

……あれ？ 熱くない、吸血鬼は太陽に弱いのに、何で？
とりあえずここはどこだろう？

「どおこよこれええええ！？」

「ぬうええええええええ！？」

この声は！ たしか月の姫とぬえだ。宴会で会ったから覚えてる。

「あんたの仕業か！？」

「ぬええええええええええ！ 首！ 首ガハア！？」「やっぱりそう
だ！」

「……あら、吸血鬼の妹だったわけ？ こんな天気なのに平気なの？」

「何故か平気みたい。それよりぬえ」

「あ」

輝夜がやっとぬえから手を離れた。泡吹いてるよ？ 大丈夫かな。

「で、ここはどこなのかしら」
「世界の悪意が見えるようだよ……」
「電池乙」
「映画ではマジキチな動きでしょ」
「何の話？」

――――

「……で、私達はひび割れに吸い込まれてここにいる、と」
「それよりこんな貧乏くさい場所私には似合わないわ。汚いし」
「何で日の光が平気なんだろう？」
3人は自分の身の回りの変化に考えを巡らす但答えが掴めない。

「とりあえず移動しましょう。こんな所に居たくないわ」
「同感。多分原因はあの隙間妖怪ね」

私達はとりあえず裏路地から表通りのような場所へ出て、情報を集めるために歩き出した。

でも気のせいかな？ さつきから誰かに見られてるような……

「しっかし汚いわねー」
「こういうの何て言うんだっけ？ ジャンク？」
「人がいないね。……ねえ、ぬえ。羽は？」
「羽？ あんたこそ羽は？」
「え！？」

本当だ！ 気づかなかったけど羽が無い！ 日の光に平気だったり
さつきから一体何が……

「なあ嬢ちゃん達」

「「「!」」」」

振り返ると1人の男がいた。人気が無かったから驚いたよ。

「ああ悪い。驚かすつもりはなかったんだ」

「あなたは？」

「どうでもいいじゃん。それよりさあ、君達どこから来たの？
トッパス？」

トッパス？ トッパスってなんだろう？

「そうよトッパスから」

「ちょ、あんた」

「大丈夫よ。トッパスは多分お偉いさん達が住む場所でしょ？
月の姫だし嘘は言ってないわ」

「だからって。ここは幻想郷じゃないかもしれないじゃない」

「へえー、トッパスかぁ。おいお前ら出てこい！ トッパス様だ
！」

「ほらね」

「どう考えても違うでしょ!？」

周りからぞろぞろと男達が出てきた。囲まれているけどこのくらい

……。

「あれ？」

「どしたのフラン」

「スペルカードが……無い……」

「嬢ちゃん俺達と遊ぼうぜ」

「嫌！ 触らないでよ!」

「コイツ……オイ！」

「へい！」

「痛い！ 止めなさいよ！」

「ぬえ！」

「お前も遊ぼうぜ！」

「ぐあ！？」

何で！？ 力をいれてるのにびくもしない！ どうして弾幕が出ないの！？

「ちよつと！ トップスにこんなことしていいと思ってるの！？」

「わかつてねえなあ！！ トップスだから征服感が強いだろ？」

大丈夫だ、気持ちよくしてやるからさあ！」

ブオオオオ！！

「何だ！？」

黒い獣のような物が私達の目の前にものすごいスピードで飛び出してきた。人！？ 誰なの！？

「おいおい真つ昼間からストリップショーか？」 「何だお前？」

「兄貴！ コイツは黒鯨ですよ！」

「黒鯨？ コイツが？」

「黒鯨つてヤバい奴だろ！？」

「ああ！ 喧嘩売りに行った奴が泣きながら帰ってきたって」

「恐喝しようとした奴らが逆に恐喝されて裸で吊されてたつて聞いたぞ！」

「多人数相手にかかわらずボコボコにしたって噂もあるぜ！」

「調子がいいとワンターンキル連発とか！ 黒いカードも持っているらしいぞ」

「騒ぐなうつとおしい！」

「「「はい！」」」

黒鯨？ 味方……なの？

「やれやれ、女相手にこの人数か……。
おい」

デュエルしろよ

「デュエル挑むのかあ？ この俺に？」

「兄貴、止めたほうがいいって……」

「るせえ！！ 今すぐ俺がボコボコにしてやるよ！」

「「デュエル！」」

何なの？ いきなり手に付いていた物が変形して2人ともカードを持っている。スペルカードのような物？

「俺のターンからだあ！！ ガーゴイルを召喚してデーモンの斧を装備！ 攻撃力2000だあ！」

「ああ……兄貴」

「兄貴頑張ってくれ！」

「負けるなー！」

「ターンエンド！」

「な、何なのよこれ……」

「大丈夫？ 輝夜」

震えながらもコクリと頷いた。怪我は無いよね……

「俺のターン、ドロー。はっ、スカル・クラーケンを召喚！」スカル・クラーケン

ATK600

「ギャハハハ！ そんなクズで何ができるんだよ？」

「クズと頭は使いようさ。スカルクラーケンの効果発動！ 召喚に成功で相手の表側魔法を一枚破壊する！」

骨の妖怪が黒い煙を吐くとガーゴイルと呼ばれている妖怪の斧が錆びて崩れた。マジック？ 攻撃力？

「それでもガーゴイルにはとどかねえよ！」

ガーゴイル

ATK1000

「フツ、相手の魔法カードが発動・破壊されたことによりマジック・シャッカードを手札から特殊召喚！ さらにシャッカードが特殊召喚されたことによりシャーク・サッカーを特殊召喚！」

「雑魚を並べたところで！」

「解ってねえなあ。」

シャーク・サッカーとマジック・シャッカードをオーバーレイ！

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！

現れよ！ 黒の海兵、ブラック・レイ・ランサー！
ATK2100

黒い渦へ光となったモンスターが吸い込まれ爆発があったかと思うと、赤い槍を持って全身を黒い鎧で包んだ半魚人が出てきた。

「何だコイツ……」

「兄貴！」

「この世に無駄は無いのさ。ブラック・レイ・ランサーで攻撃！
ブラックスピア！」

「ぐお!？」

LP4000 2900

「カードを駆使して相手のライフを減らす？」

「そうみたいだね……」

「スカル・クラーケンでダイレクトアタック！」

LP2900 2300

「馬鹿が！ 次のターンそいつに攻撃して大ダメージを与えてやるぜ！」

「忠告ありがとう。スカル・クラーケンの効果発動。1ターンに1度守備表示に変更できる。カードを2枚セットしてターンエンド」

「ちっ……ドロー。」

……くくっ、ハハハハハ！ ホルスの黒炎竜LV4を召喚！

さらにレベルアップを発動！ LV6へ進化させる！」

ATK2300

「ホルスねえ、LV8になったら厄介だな」

「ホルスで黒いのを攻撃だあ！」

「ま、無いけどな。トラップ発動！ インターセプト・ガード！

スカル・クラーケンをリリースし、相手モンスターの攻撃を無効にする。その後、リリースしたモンスターの守備力分だけ攻撃力を下げる！」

ホルスLV6

ATK2300 700

「何だと！？ 俺のホルスが……。くそつ、カードを一枚セットしてターンエンド！」

「俺のターン、ドロー」

「この瞬間！ トラップ、拷問車輪を発動するぜ！」

ブラック・レイ・ランサーがトゲ付きの車輪に縛りつけられた。：

…だが

「それがなければあと1ターン……。いや無いか。タイミング考えようぜ、トラップ発動、爆弾ウニ・ボム・アーチン！」

自分のスタンバイフェイズに相手フィールド上にトラップカードが存在する場合、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

男の周りに爆弾ウニが数個現れ、一気に爆発した。

「ぐおおお！？」

男LP

2300 1300

「「兄貴！」」

「やべえぜコイツは！」「まだだあ！ まだ拷問車輪が「さて、俺はエクシーズ・トルネードを発動する。エクシーズモンスター1体

のエクシーズ素材を任意の数取り除くことで、その数だけフィール
ド上のマジック・トラップを破壊する……。もう言わなくても解る
よな？」

「あ、ああああ」

「ブラック・レイ・ランサーでホルスを攻撃！ ブラック・スピ

ア！」

「ばかなあああ！？」 Win 黒鮫

サテライトの黒鯨（後書き）

東方キャラが多いので明確に解る人以外は名前が付くようになりま
す。見づらかったらごめんなさい。

飛ばされた人達（前書き）

やっぱり一人称視点はムズい。元の書き方に戻します……

飛ばされた人達

「覚えていやがれー!!」

「兄貴ー!!」

捨て台詞を残し男達はその場から逃げ去っていった。彼等を追い払った男は何かを確認するように一枚のカードを見ている。

やがてそのカードをデッキースに入れ、フラン達に近づいた。

「黒鯨だっけ？ 危ないところをありがとう」

「どういたしまして。お前等トップスか？ 綺麗な服装だな」

「アンタ……」

先ほどの言葉からまた同じ事が起きるのではないかと輝夜は警戒する。

「俺はそんなことしねえさ。……あいつら見ただろ？ ここはそんな場所さ。自由研究気分なら帰りな、金はあるんだろ？」
自分達が持つてる金はこの場所で使えるのかと考える三人。

「ええつと……これ使える？」

ぬえはポケットから幻想郷の小銭を取り出した。

だが男は何だそれと答えた。

「やっぱりかあ……」

「お金が使えないとか……何なのよここは」

「訳ありの連中か？……住む所なら貸してやるぞ」

「何でこんなに狭いのよ！」

「しょうがないでしょう！　出れないんですから！」

「ちよつとどこ触ってるんですか！？　じっとしていなさい！」

「うにゅー！」

「押すな！！　痛たた！　動くな不良天人！」

5人とも目覚めると何故かコンテナの中にいた。弾幕も出せないの
でコンテナを突き破ることも出来ない。そして狭い。

「何で弾幕が出ないんだよ！」

「知らないわよ！」

「さとり様ー！！！」

「暴れないでください！　私の手が明後日の方に行こうとしてい
る！？」

「騒がないでください！」

「あんたもね！　閻魔！」

ぎゅうぎゅう詰めコンテナの外からドアが開く音がした。何者か
が入ってきたようだ。

「皆さん静かに！……で、お前等の言う幻想郷とやらはどこにあ
るんだ？」

言いづらいんだけど……異世界と云えばいいのかなあ……

異世界ね……信じがたい話だな

（どうします？）

（あの声は知ってる奴だな。確かぬえとかいう奴だ）

「助けてー!!」

「ここ開けなさいよ!」

空と天子は動かせる手でコンテナを叩く。その音と声は外部の人に聞こえたようだ。

「……コンテナ?　おい、誰かいるんだな?」

「はい、出れなくて……すみませんがここを開けてもらえませんか?」

「わかった。しかし鍵がかかってんのにどうやって入ったんだよ」

この狭い箱から解放されることに安堵の息を吐く5人。だが想像してみよう。ぎゅうぎゅう詰め of 箱といきなり開かれる出口を。

「げっ?」

「きゃっ」

「は?」

ぎゃあああああ!?

「輝夜あ……」

「妹紅あ……」

「止めなさい!　人の家ですることではないでしょう!」

会った途端に険悪ムードな2人を映姫が止める。

「うにゅ……体中が痛い……」

「倉庫みたいな場所ね。あの店よりずっと広いわ」

「幻想郷じゃない……これは事件ですね。いいネタになりそうです」

「ホントに外は汚いわね……さっさと帰りたいわ」

どうしてこんなに人数が増えたのか……

「いやあ、カオスは強敵ですね」

「しかし……幻想郷ねえ」

「ありがとうございます。もう少しで手が逝くところでしたよ」

「すみません。大人数で押しかけてしまって」

先ほど聞いた話を頭の中で整理していた男に文と映姫が話しかけた。

「ま、困った時にはお互い様だよ。俺は遊札零次^{ゆっさつれいじ}。呼び捨てでいいよ」

「四季映姫・ヤマザナドゥです」

「射命丸文です」

「四季映姫・ヤマザナドゥ……覚えづらい名前だな」

「はっきり言ってるじゃないですか。しかも噛まずに」

自己紹介を始めた三人に我も我もと少女達が寄ってくる。

「ちょっと私を置いてきぼりにしないでよ、私は比那名居 天子。」

天人よ」

「封獣ぬえよ、よろしくね零次」

「私の名前はね、靈鳥路空だよ」

「人数多すぎ!？」

「フランに文、天子に映姫に妹紅、お空、輝夜、ぬえ……あつてるよな?」「全部正解です、凄い記憶力ですね。この量の名前を一回聞いて覚えるとは並大抵の記憶力じゃできませんよ」

「それよりここは一体何なの? 空は飛べないし、弹幕も出せないし、暴漢に襲われるしで訳が解らないわ」

輝夜の言葉に全員が頷く。ぬえや空達の羽は無く、段幕も出せず空も飛べない、解らない事だらけだ。

「ああ、お前達はサテライトを知らなかったな」

そう言つて零次はそばにあったホワイトボードに地図を貼り付けた。

「まずはネオ童実野シティを説明しなきゃならんかなー」

「私達はネオ童実野シティのサテライトってどこに居るのか?」

妹紅の言葉に零次が頷く。

「そうだ。ただシティとサテライトは海で隔たれていてな、サテラ

イトはここになる」

離れ小島を棒で差した。シティに比べると小さい。

「離れ小島じゃない！」

「シティにはどうやって行くのですか？」

孤島という事実には驚く天子。出る方法はないかと映姫が質問する。だが零次は首を横に振った、その答えにぬえが問いただす。

「俺は自由に行き来できるが、お前たちは無理だな」

「どうして？ 通行証でもいるの？」

「そうだ。俺は持っているが基本的にサテライトの住民は発行できない」

「でも私達はサテライトの住民じゃないけど」

サテライトの人は駄目。その事実には今度はフランが口を開いた。

「どうしてサテライトは駄目なの？」

「それは階級制度を含めて話そう。ネオ童実野シティは大まかにトップス、シティ、サテライトに別れていてな、サテライトは最下層住んでいるだけでクズ扱いだからさ」

興味深い話ですね、とメモ帳に記す文。

「差別階級ですか……なぜ差別されているのですか？ 貧富の差ですか？」

「それもある。主な理由はマーカー付きが住む場所だからかな」

「マーカー？」

聞き慣れない言葉に全員首を傾げた。

「あつ、もしかして顔に付いている黄色いマーク？」

逃げていった男達の頬に描いてあった黄色いマークを思い出した。
あのマークにどんな意味があるのだろうか。

「正解。マーカーとはな……………この話を知らない奴にするにはキツイぜ」

「一体何なのですか？ 差別を引き起こすまでとは」

「マーカーはな……………犯罪を犯した者に罪の軽重関わらず激痛をもつて顔に焼き付けられるマークだ。そのマークからは信号が発信され、そいつがどこにいるかずっと監視される。やがてマーカー付きは社会から追放されこのサテライトに流れ着き、このスラム街での生活を余儀なくされる。シティに戻ることはできないしマーカーは一生消えず、消されることも無い。後は周りから卑下されながら死ぬだけだ。もう二度と普通の生活には戻れないだろうな」

全員が沈黙した。そしておずおずと天子が口を開く。

「……………何よそれ、おかしいんじゃないの？」

かつて天子は幻想郷に異変を起こしたことがある。だがその悪事も反省して今や立派に幻想郷の一員である。

文もたまに盗撮紛いの事をして追いかけられることもある。
マーカーが幻想郷にもあつたら自分達は……………と考えぞつとした。

「確かに悪事には罰だけどそこまで……………」

「酷い……………反省しても許してもらえないなんて」

「そんなのおかしいよ！　もう家族にも会いにいけないの！？」

「それがこの街だ。セキュリティに捕まったら最後。子供も老人も関係なく生活を奪われる」

「警察とか社会は何も感じないの？　そんな制度ふざけてるわ！」

閻魔である映姫はマーカーの制度を許すことが出来ない。月の姫である輝夜もこんな制度は受け入れないだろう。

「セキュリティも酷いものさ。ここの住民をクズとしか思っていないし、酷い時には気分次第で逮捕。罪を勝手に作られる場合もある。サテライトに住んでいるだけで罪になることだってあるのさ」

「おかしいですよ……」

「……そういえば、どうして零次はここにいるの？　マーカー付いてないし、シティには住まないの？」

「……この街で育った奴だっている。何も罪の無い奴がここに住んでいるだけでクズだなんて悲しいからな。そんな理由さ。」

「……俺はここで商売をしている。お前達の生活は保証するがきちんと仕事はしてもらうからな」

仕事という言葉に一名拒絶反応を示した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884ba/>

幻想決闘伝6 D's

2012年1月14日20時55分発行